

中国語話者の依頼メール文に見る待遇表現の実態と指導による変化 —件名・宛名・書き出しの観点から—

石黒 圭

【キーワード】 依頼メール・冒頭・中国人学習者・学習者コーパス・ポライトネス

【要旨】

本稿は、海外の大学で日本語学習者の作文の収集を行う W-CoLeJa プロジェクトの一環として、中国国内の大学で収集を行ったメール文の分析結果を報告する。メール文の調査は 2023 年春に二つのクラス、計 47 名にたいして実施されたもので、学習者はメール文を事前課題として書いたあと、そのメールにかんする授業を受講し、事後の書き直しを行っている。調査ではメールによる一連のやりとりが想定され、日本にいる講師への講演の依頼、講演受諾後の講演日時の調整、講演終了後のお礼メールの送付という三つの課題に分かれているが、本稿は、その最初の課題である講演依頼のメールを、件名・宛名・書き出しという三つの観点から分析したものである。

分析の結果、事前課題のメールでは中国語や中国文化の影響を受けた誤りが多く見られた。件名では、「講演」のかわりに「講座」が、「お願い」のかわりに「誘い」「招待」「案内」などが使われて書き手の依頼意図が伝わりにくくなったほか、「～のメール」といった無駄な要素がつくもの、「講演の誘う」のような名詞化がうまくいかないものなどが見られた。また、宛名では、「尊敬する」を宛名のまえに、「:」のような記号を宛名のあとにつけるもののほか、宛名自体がないもの、所属がないもの、名字のみのもの、「先生」ではなく「教授」「様」「さん」をつけるものなど、誤りとは言いがたいが、受け手に違和感を与えるものが見られた。さらに、書き出しでは、「こんにちは」「お元気ですか」といった挨拶におけるあらたまりの不足や、名乗るさいに所属先だけで済ませたり「～と申します」を使えなかったりするなどの敬意の不足が見られた。こうした困難点は、授業指導のなかで大きく改善されたが、一方で、メール文自体の多様性が損なわれ、型にはまったメールになるという弊害も見られた。今後は、そうした教室指導の長所と短所を踏まえた指導法の提案が求められる。

1. はじめに

1. 1 作文コーパスの可能性と限界

国立国語研究所の共同研究プロジェクトとして筆者が主導するプロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」では、2022 年より、海外のおよそ 20 の大学で日本語学習者の作文を収集し、『日本語学習者縦断作文コーパス (Written Corpus of Learner Japanese、略称、W-CoLeJa)』として構築する計画を進めている。学部 4 年間にわたる縦断コーパスであること、母語による対訳がついていること、執筆過程が記録されていることなど、従来のコーパスにはあまり見られないユニークな性質を備えたコーパスとして、第二言語習得研究に幅広く活用されることが期待されている。

しかし、このコーパスを構築するにあたり、筆者が限界を感じている点がある。それは、作文というもののコミュニケーション性の乏しさである。作文は教室のなかで練習として書かれる文章であり、実際の生活のなかで読まれることを前提としていない。私たちが通常文章を書く場合、実生活で読まれ、役立てられることを期待して書く。つまり、読み手に必要な情報を伝えるにせよ、読み手に面白がってもらうにせよ、読むことが目的なのである。それは学術的な論文でも、メディアの記事でも、SNS の書き込みでも同じである。しかし、作文というものは、その情報を必要としてくれる、あるいは興味を持ってくれる具体的な読者が想定されていない。読んでくれるとしても、教師が読むか、教室のなかで紹介されればクラスメートが読んでくれる程度である。学習者の日本語力や困難点を調査する場合、調査対象が生きた言葉を伝えるコミュニケーションであることが望まれ、W-CoLeJa 収集のさいには国立国語研究所のスタッフが作文を読んだ感想をフィードバックするなど、生きたコミュニケーションになるように工夫を行っているが、作文全般に言える傾向として、その文章を読みたいと思う具体的な読み手が想定しがたく、コミュニケーション性が乏しくなるきらいがある。

1. 2 生きたコミュニケーションとしてのメール文コーパス

そこで、筆者は上記の W-CoLeJa のいわばスピノフ企画として、学習者メール文コーパスの収集・構築に着手することにした。メール文は、特定の相手にむけて書く文章であるため、読み手の存在が明確に意識され、生きたコミュニケーションになる可能性が高い。特定の読み手とのコミュニケーションであるため、書き手と読み手の親疎関係や上下関係といった人間関係が文章に投影され、社会言語学的なバリエーションを見るのにも適している。そこでは、情報の伝達のみならず、感情の伝達にも焦点が当たり、待遇コミュニケーションにかかわる言語の情緒的な側面の分析にも向いていると考えられる。

もちろん、メール文コーパスはこれまでもいくつか構築が試みられ、分析に用いられている。ここでは、よく知られているものを二つ挙げる。一つは、金澤裕之氏が中心となって構築した「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」に収録されているメール文コーパスである。「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」は横浜国立

大学で構築されたもので、従来の母語別、レベル別という学習者コーパスとは異なり、タスク別に力を入れた点に特徴がある。そのタスクのなかにメールが含まれており、東（2014, 2016）、志賀（2017）、閻（2018）、谷・坂本・山下（2021）など、このメール文を対象にした研究がこれまで広く行われているほか、ここからの発展として金庭久美子氏の科研費基盤研究(C)「タスク別書き言葉コーパスを利用したメール文の web 自動採点システムの開発」の成果として、メール文の web 自動採点システム『花便り』（<https://hanadayori.overworks.jp/>）の開発に結びついている（金庭・川村・橋本・小林2019）。

もう一つは、東会娟氏が科研費の若手研究(B)「メール文コーパスの構築と日本語学習者メールリテラシーの習得に関する研究」で収集した「中国語・韓国語を母語とする日本語学習者縦断的メール文コーパス」（<http://emailtest.sakura.ne.jp/data/>）がある。学習者については半年ごとに3度、データを収集した縦断的性格を有するコーパスであり、東（2019）のほか、菊池・大関（2023）などで使用が見られ、今後の活用が見こまれるコーパスである。

2. 本研究の資料

2. 1 本研究のメール文コーパスの特徴

このように優れた学習者メール文コーパスは複数存在するが、実際のメールは、学習者の母語、日本語レベル、受け手との関係、送信の目的、本文の内容等によってさまざまであり、今後一層の充実が望まれる。そこで、上述のように、筆者もまた学習者メール文コーパスの開発に着手したわけであるが、その設計において従来のコーパスにない点として心がけたのは次の4点である。

- ①コミュニケーション自体に真正性がある
- ②複数回のやりとりがある
- ③教室指導との連動性がある
- ④執筆プロセスも問題にできる

①「コミュニケーション自体に真正性がある」は、向山（2016:95）で「タスク中心の教授法においては真正性が重視されているため、現実社会のタスクを反映させて真正性を高めた教育用タスクの使用がより大きな効果をもたらすと予測される」と述べられているとおり、メール文コーパスにおいては現実社会のタスクを反映させるのが望ましいと思われる。そこで、開発中のコーパスでは筆者にたいする学習者による講演依頼という設定を選択した。筆者はその講演依頼に応じて実際に講演を行っており、教室のなかの練習で完結するタスクではなく、現実社会と接点を持つタスクとなっている。

②「複数回のやりとりがある」もまた、広い意味でのコミュニケーションの真正性にかかわるものである。メールは執筆して送信して終わりというものではない。多くの場合、返信があり、その返信にたいしてまた返信し、といったやりとりの連続性があるものである。しかし、これまでのメールの分析は、1通の文面だけを問題にすることが多かった。そこで、開発中のコーパスでは、「講演の依頼」⇒「講演の受諾」⇒「日程調整の依頼」⇒「日程の回答」⇒（実際の講演を挟んで）⇒「講演のお礼の送付」という流れで調査を行い、メールにおけるやりとりの連続性を組み込むことにした。これにより、一連のメールのやりとりが分析可能になっている。

③「教室指導との連動性がある」については、自分が書いたメールを扱った授業を受講したうえで書き直すという過程を設けた。それにより、教室で指導を受けた結果、学習者にどのような気づきが得られ、それをメールの文面にどのように反映させるかが分析できるようになっており、教室指導のさいの資料としての活用が期待される。

④「執筆プロセスも問題にできる」では、このメール文を EssayLogger という自主開発のアプリで執筆してもらうことで、キーストロークを記録するようにした。これにより、執筆時に学習者がどこで考え、どの部分をどう書き直したかといった執筆プロセスが追えるようになっている。この①～④がコーパスの開発にあたり、工夫した点である。

2. 2 本研究のメール文コーパスの概要

本研究のメール文コーパスの資料は、2023 年の 4 月から 5 月にかけて、華南農業大学の張秀娟氏の協力を得て、国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員の須賀和香子氏と共同で収集したものである。学生は、華南農業大学の中国語話者の学部 3 年生 47 名であり、メール文を作成するという 5 回の授業のなかで行われた。

具体的には、クラス担当の教員（張秀娟氏）に紹介された面識のない教授（筆者）に、①講演の依頼、②日程調整の依頼、③講演のお礼の送付という一連のメールを書くというものである。①～③の 3 通のメールは、授業の前にそれぞれ宿題として提出することが求められる。また、①～③の 3 通のメールにたいする授業は、①～③の三つの課題にたいしてそれぞれ実施され、各回の授業を受けた学生はその授業の内容を参考に、自力で書いたメールを修正して提出することになっている。授業の流れは次のとおりである。

- ・第 1 週 依頼メール課題の提示
授業後、各自依頼メール執筆・提出
- ・第 2 週 依頼メールのフィードバック、日程調整メール課題の提示
授業後、各自依頼メール書き直し・再提出
授業後、各自日程調整メール執筆・提出
- ・第 3 週 日程調整のメールのフィードバック

授業後、各自日程調整メール書き直し・再提出

- ・第4週 石黒の講演、お礼メール課題の提示

講演後、お礼メールの執筆・提出

- ・第5週 お礼メールのフィードバック

授業後、各自お礼メール書き直し・再提出

テーマの詳細は下記のとおりであるが、実際の指示は中国語である。

- ・テーマ①「国立国語研究所の石黒圭教授に講演の依頼をする」

日本人の先生を招いて学生のための講演会を行うことになりました。あなたはその講演会の準備の担当者です。講演者について張秀娟先生に相談したところ、国立国語研究所の石黒圭教授を紹介されました。石黒教授にメールをして、講演会での講演を依頼してください。

講演会は、オンライン実施します。日にちは4月下旬から5月上旬を予定しており、講演時間は1時間程度です。時間は昼でも夜でも可能です。講演のテーマについては、石黒先生に、どのようなテーマで話ができるかを聞いてください。

- ・テーマ②「国立国語研究所の石黒圭教授と講演の日程調整をする」

石黒教授は、みなさんが書いたメール文1の依頼を読み、下のような返信をみなさんに書きました。この教授からの返信を読んで、メール文2を書いてください。
(返信は略)

教授は講演を承諾してくれましたので、具体的な講演の日と時間、そして講演テーマを、メールで石黒教授と相談してください。

あなたは、講演は木曜日に実施したいと思っています。できれば4月27日(木)が良いと思っていますが、別の日でも構いません。ただ、5月11日(木)以降はテストが近くなるので避けたいです。時間は昼でも夜でもかまいません。

テーマについては、石黒教授からの返信を読んで、あなたが希望するテーマを伝えてください。

- ・テーマ③「国立国語研究所の石黒教授に講演のお礼メールを書く」

石黒教授の講演が終わりました。石黒教授にお礼のメールを送ってください。

この3回の授業は、クラスの47名の学生が二つのクラスに分かれて実施されている。一つのクラス(26名)は日本語母語話者が書いたモデル文を見て気づきを促す授業であり、同じ課題で日本語母語話者が書いたモデル文を見せて比較しながら学生自身の気

づきを促し、それに基づき学生自身がメール文の改稿を行ったものである。もう一つのクラス（21名）は教師主導型の授業であり、やはり日本語母語話者が書いたモデル文を見せながら、学生の母語である中国語でメール文の書き方を解説し、そのうえで学生自身がメール文の改稿を行ったものである。

2. 3 本稿の分析対象と分析方法

本稿では、上記テーマ①～テーマ③のうち、テーマ①講演の依頼のメール文に焦点を当て、分析を行う。依頼メールは、件名⇒宛名⇒切り出し⇒自己紹介⇒前置き⇒状況説明⇒依頼⇒副次的依頼⇒挨拶⇒署名の順が典型とされている（谷・坂本・山下 2021）が、本稿では、具体的な分析対象は、最初の三つに限定する。なお、「切り出し」を「書き出し」としたのは、実際の学習者の書き出しには「自己紹介」が多く見られたからである。

- ・ 件名（書き手が用件をどう簡潔に示すのか：3 節で扱う）
- ・ 宛名（書き手が読み手をどう位置づけるのか：4 節で扱う）
- ・ 書き出し（書き手が読み手とどう関係を築くのか：5 節で扱う）

これまでのメール文研究においてよく扱われる機能は依頼、断り、謝罪であり、なかでも依頼が多い。依頼が多く扱われる理由は、対人的な配慮が求められる難易度の高いコミュニケーションであることにくわえ、学習者が実際に書く機会が多いためであると思われる。ここでは、依頼メール文ける依頼の研究のなかでも、件名、宛名、書き出しといった分析観点にかかわる先行研究として、太田（2015）と東（2019）を取り上げる。

太田（2015）は、日本語を母語とする学部生 72 名の依頼メール文を分析した研究であるが、件名は、件名自体を書いてこない学生が 18 名、宛名は、宛名の記載がなかった学生が 42 名という結果が示され、その背景には LINE のような同時性・双方向性の高いツールに慣れた学生が件名や宛名を気にしない傾向があることが指摘されている。現状、ビジネスの世界でも slack のようなチャットツールが広がる傾向があり、今後は同時性・双方向性の高いコミュニケーションに一層シフトしていくことが予想され、件名にたいする意識が下がることこそあれ、上がることは考えにくいと思われる。

東（2019）は、日本語母語話者、中国語話者、韓国語話者の学部生各 30 名に、負担度の異なる二つの依頼内容で、先生と友人という二つの相手に計四つのパターンで書かせた日本語依頼メール文の件名を分析したものである。その結果、日本語母語話者は、依頼内容や相手に関係なく、件名に依頼の趣旨を明示し、「アンケートの依頼」「書籍の利用のお願い」のような名詞止めの表現を用いる傾向が見られたのにたいし、中国語話者は依頼の趣旨は明示するものの、不適切な日本語表現が目立つ傾向があること、韓

国語話者は依頼の趣旨に触れずに宛名や自己紹介、あいさつなどを件名に用いる傾向があることが示されている。

一方、本稿の分析では、件名、宛名、書き出しという三つについて、それぞれの表現を見た筆者が評価するという形を取る。メールの評価研究は森（2010）、胡（2014）、菊池（2016a, 2016b）など、先行研究でもいくつか見られ、属性の異なる複数の評価者によってどのように評価を行うかという分析もすでに行われている。しかし、本研究はコミュニケーションの真正性を重視する研究であり、コミュニケーション研究は、時枝（1950）の言語過程観のように言語を主体的な立場で研究するのが望ましいと考え、今回分析対象となっているメールの第一の読み手である筆者の主体的な評価をもとに分析を行うことにした。

以上を踏まえた本稿の研究課題（RQ）は次のとおりである。

RQ1：中国語話者の依頼メール文にはどのような表現が用いられているか。

RQ2：理解主体（筆者）は依頼メール文を読んでその表現をどう感じたか。

RQ3：依頼メール文の表現指導はどうあるべきか。

3. 件名から見た依頼メール文

3. 1 修正前メールの件名分析結果

まずは件名から検討を行う。今回の調査で期待される典型的な件名は、「ご講演のお願い」のような件名であった。前半の「ご講演」で依頼の内容が、後半の「お願い」で依頼であること自体が明確になる必要があると思われる。しかし、この条件を満たしている件名は 47 件中、「石黒圭先生への講演のお願い」「ご講演をお願いします」のわずか 2 件であり、それ以外の 45 件は受信者である筆者が違和感を抱いた件名であった。その違和感の要因をここでは四つに分けて示す。

違和感を抱いた要因の一つ目は「講演」をめぐる表現選択で、「講演」が 6 件なのに対し、「講座」が 25 件、「スピーチ」が 1 件であった。「講座」は入門的な内容で、カルチャーセンター等で定期的に開かれる授業を想起させる一方、「講演」は専門性の高い教員が特別に担当する単発の企画をイメージさせ、「講座」という件名は、依頼内容とのズレを感じさせてしまう。件名にこれだけ多くの「講座」が表れた背景には、中国語による指示文の影響がある。テーマ①の内容は、日本語では「国立国語研究所の石黒圭教授に講演の依頼をする」であるが、この中国語の翻訳が「拜托国立国語研究所石黒圭教授做讲座」であったため、学生は中国語の指示文にある「讲座（講座）」をそのまま使ったものと思われる。なお、中国語でも「讲演（講演）」や、より一般的な「演讲（演講）」は用いられるが、いずれも動詞的で、「演説」や「スピーチ」に近く、よりわ

かりやすい話し方を指すことが多いようである。

違和感を抱いた要因の二つ目は「お願い」をめぐる表現選択で、「お願い」の6件にたいし、「誘い／誘う」が11件、「招待」が9件、「案内」が7件、「要請」「申請」「参加」「担当」「質問」が各1件であった。よく見られたものとしては、「石黒圭教授を誘って講座をするためのメール」「講座の招待について」「講座のご案内」のようなものである。ここでは「講座」にくらべて表現選択がかなりばらついている印象があるが、やはり中国語の「拜托」をどのように解釈し、どのように日本語で表現するかが、ここでの表現選択に影響を及ぼしているように見える。

違和感を抱いた要因の三つ目は媒体への言及である。「石黒先生への電子メール」のように件名に「メール」がつくものが8件、「石黒圭先生へのスピーチの招待状」のように「招待状」がつくものが7件、「講座案内状」のように「案内状」がつくものが4件、「石黒圭先生への手紙」のように「手紙」がつくものが1件であった。Eメールとして送られてきているのは明らかなので、「メール」という情報は冗長にすぎる一方、「招待状」「案内状」「手紙」のように紙媒体の書簡を想起させるものは、とくに用件を添付ファイルではなく、本文に書いてくるものの場合、受け手に違和感を与える可能性が高いと思われる。

違和感を抱いた要因の四つ目は文法の誤りで、とくに動詞を使った件名に問題が見られた。これは、日本母語話者が名詞止めを好む一方、中国語話者に動詞を用いた不自然な表現が多いことを示した東（2019）の分析結果を支持している。多くは件名を名詞化するさいに起きた不自然さであり、「講座誘い」「講演の誘う」「石黒先生への誘う」「華南農業大学講演会への誘う」「講座の要請についてメール」「日本語に対する学習と研究の講座の誘い」「作文に関するスピーチの誘うこと」「華南農業大学の学生たちに講座のお願い」「華南農業大学で講演する招待状」「石黒先生が華南農業大学に講座をする招待状」「石黒先生を招いて講座を担当するの件」といった11件に違和感を抱いた。

表 1. 修正前メールの件名の不自然さ（45/47 件）

	自然な表現	不自然な表現
依頼内容「講演」	「講演」6	「講座」25、「スピーチ」1
依頼行動「お願い」	「お願い」6	「誘い／誘う」11、「招待」9、「案内」7、「要請」「申請」「参加」「担当」「質問」各1
付加要素「メール」	—	「メール」8、「招待状」7、「案内状」4、「手紙」1
誤用等	—	「講演の誘う」のような名詞化に伴う誤用 11

なお、違和感を抱く要因として敬語の不使用も考えられるが、受け手としては「ご講演」の「ご」が抜けているなどの表現は、上記に示した四つの要因とくらべて、相対的にはあまり気にならなかった。

3. 2 修正後メールの件名分析結果

一方、授業において指導が行われたあとの件名の不自然さはどうだろうか。1 名が空メールの提出であったため、対象者は 46 名である。修正前メールにおける件名が不自然なメールの割合は 45/47 件 (95.7%) であったのに対し、修正後メールにおける件名が不自然なメールの割合は 13/46 件 (28.3%) と大きく減少している。二つのクラスでの大きな差は見られなかったため、両者を区別せず、修正後メールとして一括して扱うことにする。

修正後のメールで件名の不自然さが激減した最大の理由は、25 件あった「講座」がほぼなくなったからである。「講演」の使用数はさらに増え、40 件にも達している。また、「誘い」「招待」「案内」にばらけていたものも「お願い」にまとまり、36 件になっている。「お願い」の「お」が落ちている 2 例も含めると、38 件になる。この二つを合わせると、29 件の「ご講演のお願い」という組み合わせに収斂されたことになる。

表 2. 修正後メールの件名の不自然さ (13/46 件)

	自然な表現	不自然な表現
依頼内容「講演」	「講演」 40	「講座」 1
依頼行動「お願い」	「お願い」 36	「願い」 2、「誘い」 2、「招待」 1、「案内」 1
付加要素「メール」	—	「メール」 2、「招待状」 1、「案内状」 1、「返事」 1
誤用等	—	「ご講演を願ひ」 3、「国語大学講演会」 2、「西黒圭教授」 1

4. 宛名から見た依頼メール文

4. 1 修正前メールの宛名分析結果

「件名」の検討では 47 件中 45 件について違和感を抱いたが、「宛名」の検討では違和感を抱いたものは比較的少なく、47 件中 21 件であり、素直に受け入れられる宛名が多かった。違和感を抱いたもののうち 17 件は、宛名のまえにつく装飾表現「尊敬する」である。これは中国でよく使われる表現なので、中国の学生と交流の多い筆者はこの種の表現を見慣れており、違和感をさほど覚えなくなっているが、初めて見る受け手であれば違和感を覚える可能性が高いと考え、違和感のあるものと判断した。そのほかの 4

件は、「石黒さん」「拝見：石黒圭さん」「尊の石黒 圭様へ」「国立国語研究所 黒石圭先生」である。初めてメールを受け取る学生から「さん」づけされたら、さすがにそこまで親しくないと感じてしまう。「拝見」は「拝啓」の誤りであり、「尊」は「尊敬する」を短くしたものであろうが、日本語としては使われない。また、「黒石圭」は私の氏名の語順を誤ったものである。

「宛名」がないものが9件あったが、いずれも件名や本文で私の名前が適切に言及されており、問題は感じなかった。ただし、1件は「尊敬する」がついていたため、上記の17件のなかにも含めた。また、「国立国語研究所」という所属を入れてあるものが8件あったのにたいし、なかったものが30件あった。個人的にはないからと言って違和感はさほど覚えないため、違和感のあるものに含めなかったが、社会的には最初のメールでは所属も含めて示し、2回目以降で外すということが一般的であるため、所属は示したほうが失礼さが減じるだろう。また、姓名の両方を示すか、姓のみを示すかについても、いずれでも問題ないと判断するが、姓名があったほうがやはり正式な依頼という印象を与え、初対面の相手から送られてくる初回のメールを見ると、姓名セットであることが多いように思われる。「石黒圭」というフルネームが24件、「石黒」という名字のみのものは14件であった。

一方、敬称であるが、「先生」が27件、「教授」が7件、「様」が2件、「さん」が2件であった。主観的な判断になるが、ふさわしさの順で並べると次のようになる。

「先生」>「様」>「教授」>「さん」

「様」は一般的な敬称として通用しており、送り手である中国の学生は私とは直接の師弟関係にはないので、問題はないだろう。ただ、先生と呼ばれることに慣れた教員の一部が、面識のない学部生から「様」で呼ばれることに違和感を覚えるケースがないとは言えない。また、「教授」はいわゆる職階であり、「〇〇部長」「〇〇主任」「〇〇医師」「〇〇八段」といったものと同様、敬称としては厳密には機能せず、どちらかと言うと避けたほうがよい表現だと思われる。私自身は日本国内の関係者からもよく「教授」でメールが届くため違和感が低いと判断したが、職階である以上、本来は使うべきでないと考える。「教授」ではなく「准教授」「特任助教」といった肩書きだと、違和感はより強くなりそうな印象がある。「さん」は上述のとおり対等な関係を表すものであり、さすがに面識のない相手へのメールの宛名としては不適切である。

なお、宛名を明示する記号として、宛名のあとに「：」を使うものが15件、「へ」をつけるものが4件、「、」や「，」を使うものが3件あった。これらも違和感の対象とはしなかったが、本来つけないのが一般的であることを考えると、受け手によっては違和感の要因となりうる。

表 3. 修正前メールの宛名の不自然さ (21/47 件)

	自然な表現	(やや) 不自然な表現
装飾表現	—	「尊敬する」 17
誤用等	—	「石黒さん」「拝見：石黒圭さん」「尊の石黒圭様へ」「黒石圭先生」各 1
宛名の有無	宛名のあるもの 38	(宛名のないもの 9)
所属の有無	「国立国語研究所」 8	(所属のないもの 30)
氏名	フルネーム 24	(名字のみ 14)
敬称	「先生」 27	(「教授」 7、「様」 2、「さん」 2)
記号	—	(「：」 15、「へ」 4、「、」や「,」 3)

4. 2 修正後メールの宛名分析結果

修正後メールを宛名の観点から分析すると、21/47 件 (44.7%) から 8/46 件 (17.4%) へと不自然な表現がやはり減少している。16 件あった「尊敬する」が 1 件へと激減し、明らかに不自然な表現は「さん」づけが 2 件、相手の氏名を「黒石圭先生」や「西黒圭先生」と間違えたものが 2 件、相手の所属を「国立大学研究所」や「国立国語大学研究所」と間違えたものが 2 件であった。宛名のないものもまた 10 件から 2 件へと減少しているが、そのうち 1 件の本文には「石黒圭教授さま」とされているので、これもまた不自然な表現としてカウントし、不自然な表現の合計が 8 件となっている。

国立国語研究所という所属が含まれるものも 8 件から 39 件、そこに誤った所属である「国立大学研究所」や「国立国語大学研究所」も加えると 41 件となる。全体が 46 件で、そもそも宛名のないものが 2 件であることを考慮すると、じつに 93.2%に達しており、もともとの割合が 8/38 件の 21.1%であったことと比較して、教室指導のなかで所属にたいする意識が飛躍的に高まったことが伺える。フルネームかどうかと同様であり、「黒石圭」や「西黒圭」といった誤りも含めて数えると、やはり 41/44 件の 93.2%となることがわかる。修正前メールでは 22 例見られた記号の使用も 4 例になり、記号の使用が、あらたまったメールに不向きなことを理解しているように見える。これにたいし、敬称は、「先生」が 33 件、「教授」が 8 件、「さん」が 3 件と、「様」はなくなったものの、どれも人数を増やしており、この点のみ、大きな傾向の変化は見られない。

表 4. 修正後メールの宛名の不自然さ (8/46 件)

	自然な表現	(やや) 不自然な表現
装飾表現	—	「尊敬する」 1
誤用等	—	「石黒さん」「石黒圭さん」「黒石圭先生」 「西黒圭先生」「石黒圭教授さま」「国立大 学研究所」「国立国語大学研究所」 各 1
宛名の有無	宛名のあるもの 44	(宛名のないもの 2)
所属の有無	「国立国語研究所」 39	(所属のないもの 3)
氏名	フルネーム 41	(姓のみ 3)
敬称	「先生」 33	(「教授」 8、「さん」 3)
記号	—	(「:」 3、「へ」 1)

5. 書き出しから見た依頼メール文

5. 1 修正前メールの書き出し分析結果

メール本文の書き出しは多様である。ここでの分析では、「拝啓」のような定型表現と「石黒先生」のような宛名相当のものを除く、本文の最初に来るものを書き出しと認定したが、その多様性には目を見張った。タイプ別に見ると、「初めまして。」のような挨拶が 21 件でもっとも多く、ついで「突然のメールで、申し訳ございません。」のような謝罪が 11 件、「〇〇大学の〇〇と申します。」のような自己紹介が 9 件と多かった。また、「初めてご連絡させていただきます。」のような連絡が 3 件、「お名前はかねがねうかがっております。」のような敬意が 2 件、「お忙しいところお時間を割いてこのメールを読んでいただき、どうもありがとうございます。」のような感謝が 1 件であった。

そのなかで、不自然なものは 47 件中 31 件存在した。その不自然さの要因もまた多様であるが、表現のカテゴリ別に見ると、挨拶では、「こんにちは」は学部生らしい元気のよさに個人的には好感は抱くものの、初対面の相手には敬意を欠くと考え、「初めまして」のほうが自然と判断した。また、「お元気ですか」という挨拶も悪いものではないが、初対面の相手に聞くべき内容ではないと考え、「陽春の候、先生におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます」のような定型句のほうが、仰々しいものの自然であると考えた。その結果、自然な表現が 3 件、不自然な表現が 18 件という内訳となった。

謝罪は、メールを送る無礼を詫げる表現で自然な表現が多い。「お忙しいところ、申し訳ございません」のような相手の忙しさに言及するものが 4 件、「突然のご連絡失礼

いたします」のようなメール送付の唐突さに言及するものが3件、そのほか「夜分遅くに失礼いたします」が見られた。一方、不自然と判断したものは、「お忙しいところお失礼します」「お忙しいところ、大変失礼しました」のように、相手の忙しさに適切に言及しているものの、日本語に誤りが含まれたものが2件、「お邪魔させていただきます」という判断しかねるものが1件あった。

自己紹介は不自然なものが多かった。目立ったのは、「私は華南農業大学の学生です」のように所属はあるものの、自分の名前がないものが4件、「華南農業大学の〇〇でございます」のように「申します」のかわりに「でございます」になっているものが3件、「私はXXのAです」のように単に「です」で終わっているものが1件であり、「わたくしは華南農業大学の日本語科の学生で、〇〇と申します」のように「申します」で終わっているものは1件のみであった。

なお、「初めてご連絡させていただきます。」のような連絡、「お名前はかねがねうかがっております。」のような敬意、「お忙しいところお時間を割いてこのメールを読んでいただき、どうもありがとうございます。」のような感謝についても、いずれも書き出しとして十分考えられる表現であるが、表現としての自然さはまちまちであった。

表5. 修正前メールの書き出しの不自然さ (31/47件)

	自然な表現	不自然な表現
挨拶	「初めまして」2、「陽春の候、先生におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます」1	「こんにちは」等12、「お元気ですか」等4、「春になっております」「初めして」各1
謝罪	相手の忙しさに言及4、メール送付の唐突さに言及3、「夜分遅くに失礼いたします」1	日本語の誤りを含むもの2、「お邪魔させていただきます」1
自己紹介	「わたくしは華南農業大学の日本語科の学生で、〇〇と申します」1	「私は華南農業大学の学生です」等4、「華南農業大学の〇〇でございます」等3、「私はXXのAです」1
連絡	「初めてご連絡させていただきます」等2	「張先生から聞いて～」1
敬意	「お名前はかねがねうかがっております」1	「まず、私は華南農業大学の日本学科の皆さんを代表して、石黒先生に尊敬の意を表したいです」1
感謝	「お忙しいところお時間を割いてこ	

	のメールを読んでいただき、どうもありがとうございます」1	
--	------------------------------	--

5. 2 修正後メールの書き出し分析結果

教室指導の結果、修正後のメール本文の書き出しはどのように変わったのだろうか。タイプ別に見ると、「初めまして」のような挨拶が 22 件と変わらず多いが、「〇〇大学の〇〇と申します」のような自己紹介が 8 件から 20 件と急増しているのが目を惹く。また、「突然のメールで申し訳ありません」のような謝罪、「初めてご連絡させていただけます」のような連絡が各 2 件であり、敬意や感謝が消えている。ここから、表現のカテゴリは減少し、挨拶と自己紹介に極端に偏った様子が看取できる。

修正前メールでは書き出しが不自然な表現が 31/47 件と 66.2%を占めたが、修正後メールでは 4/46 件と 8.7%と激減している。その点では評価できるが、表現のバリエーションがきわめて少なくなり、挨拶は 22 件すべて「はじめまして」で始まっており、自己紹介も「～と申します」が 20 件中 17 件を占めている。つまり、修正前には豊かな多様性を有した書き出しが、修正後には画一的になっているわけであり、教室指導が型にはめる教育に傾きやすいことを示している。

表 6. 修正前メールの書き出しの不自然さ (5/46 件)

	自然な表現	不自然な表現
挨拶	「初め／はじめまして」22	
謝罪	「突然のメールで申し訳ありません」等 2	
自己紹介	「～と申します」17	「～と申し上げます」「～でございます」「～です」各 1
連絡	「初めてご連絡させていただきま す」等 2	

6. まとめ

本稿では、中国国内の大学に所属する学部生 47 名が、日本にいる講師、すなわち国立国語研究所に所属する筆者に講演の依頼を試みる依頼メール文をめぐり、件名・宛名・書き出しという三つの観点から分析を行った。

分析の結果、事前課題のメールでは中国語や中国文化の影響を受けた誤りが多く見られた。件名では、「講演」のかわりに「講座」が、「お願い」のかわりに「誘い」「招待」

「案内」などが使われて書き手の依頼意図が伝わりにくくなったほか、「～のメール」といった無駄な要素がつくもの、「講演の誘う」のような名詞化がうまくいかないものなどが見られた。また、宛名では、「尊敬する」を宛名のまえに、「:」のような記号を宛名のあとにつけるもののほか、宛名自体がないもの、所属がないもの、名字のみのもの、「先生」ではなく「教授」「様」「さん」をつけるものなど、誤りとは言いがたいが、受け手に違和感を与えるものが見られた。さらに、書き出しでは、「こんにちは」「お元気ですか」といった挨拶におけるあらたまりの不足や、名乗るさいに所属先だけで済ませたり「～と申します」を使えなかったりするなどの敬意の不足が見られた。

こうした困難点は、授業指導のなかで軒並み飛躍的に改善されていた。そのこと自体は高く評価できるが、修正の結果、メール文自体の多様性が損なわれ、型にはまった、似たようなメールばかりになるという弊害も見られた。

依頼メール文というものは社会性が求められるものであり、読み手に違和感を与える表現は、依頼そのものが不首尾に終わったり、ときには書き手と受け手の人間関係を損ねたりするおそれのあるものである。その点で、型にはまったとしてもきちんと是正すべきであるという立場もありうる。反対に、せっかく学習者が自分なりの発想で書いてきたものを型にはめてしまうと、学習者の素直な気持ちが伝わらず、依頼の成功に結びつく芽を摘んでしまうおそれもあるだろうし、ChatGPT のようなテキスト生成 AI が書けそうなメールがあふれる趨勢に加担してしまうことにもなりかねないと悲観する立場もありうる。

今回の分析結果を踏まえ、ライティングという書き手の顔が垣間見える創造性の高い作業を今後どのように教室指導すべきか、その検討があらためて求められるであろう。本調査の授業では、さいわい、教師がメールの書き方を指導するクラスにくわえ、日本語母語話者が書いたモデル文を見て気づきを促す授業が並行して行われている。今後は、受講した学習者への聞き取り調査の結果などを参考にしながら、二つの授業を比較・検討し、一般性と個性が両立する授業のあり方を模索する必要があると考える。今後の課題としたい。

【付記】

本研究は、科研費 JP21H04417 および国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者の作文の縦断コーパス研究」の研究成果である。調査に協力してくださった張秀娟氏、須賀和香子氏、華南農業大学の学生のみなさまに感謝申し上げる。

【参考文献】

閻薇（2018）「学生から教師へのメールの書式と表現に関する考察—日本語母語話者と学習者の比較を中心に—」『日本語研究』38, pp.17-31, 東京都立大学日本語・日本語教育研

究会.

- 太田陽子 (2015)「依頼メール作成タスクに見る大学生のポライトネス意識」『相模国文』 42, pp.125-136, 相模女子大学.
- 金庭久美子・川村よし子・橋本直幸・小林秀和 (2019)「メール作成タスクを用いた作文支援システム」當作靖彦監修・李在鎬編『ICT×日本語教育—情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践—』 pp.178-191, ひつじ書房
- 菊池理紗 (2016a)「日本語の E メールに対する読み手の「評価」—「一斉送信メール」を対象としたケーススタディー」『待遇コミュニケーション研究』 13, pp.35-51.
- 菊池理紗 (2016b)「メールに対する読み手の評価とその共通点に関する考察」『実践女子大学生生活科学部紀要』 53, pp.69-77.
- 胡芸群 (2014)「メールに対する読み手の評価—読み手の属性による評価の観点の違い—」『一橋大学国際教育センター紀要』 5, pp.81-91.
- 菊池理紗・大関洋平 (2023)「公的なメールに対する BERT を用いたセンチメント分析」『言語処理学会第 29 回年次大会発表論文集』 pp.1708-1712
- 志賀里美 (2017)『YNU 書き言葉コーパス』から見た複合動詞の使用実態—日本語母語話者と中国人学習者との比較—『恵泉女学園大学紀要』 29, pp.69-91
- 谷誠司・坂本勝信・山下浩一 (2021)『YNU 書き言葉コーパス』における日本人大学生から教師への依頼メールの構成分析『常葉大学外国語学部紀要』 37, pp.51-66
- 時枝誠記 (1950)『国語学原論』岩波書店
- 東会娟 (2014)「中国人日本語学習者のメールにおける依頼の展開構造について—日本語母語話者との比較を通じて—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』 22, 31-52, 名古屋大学留学生センター
- 東会娟 (2016)「韓国人日本語学習者のメールにおける依頼のストラテジー—日本語母話者と比較して—」『情報処理センター年報』 18, pp.89-103, 帝京大学情報処理センター
- 東会娟 (2019)「依頼メールの件名のつけ方に見る日本語学習者のメールリテラシーとその課題」『情報処理センター年報』 21, pp.93-104, 帝京大学情報処理センター
- 向山陽子 (2016)「真正性を高めたタスク教材を用いた指導の効果—ビジネスメール・ビジネス文書作成に焦点を当てて—」『日本語教育』 164, pp.94-109
- 森篤嗣 (2010)「母語話者が書いた日本語メール文」に対する非母語話者の評価—中国系非母語話者 3 名の質的手法によるケーススタディー—『待遇コミュニケーション研究』 7, pp.81-96.

(イシグロケイ・国立国語研究所)